

1. はじめに

阿賀野市内の山々も雪化粧し、厳しい寒さが身に伝わる季節になってきました。外輪橋遺跡も何度も雪に覆われ、除雪しながらの調査となりましたが、12月29日に発掘調査を終了することができました。

2. 発掘調査の状況

【C区】

C区では、竪穴建物（たてあなたてもの）が見つかりました（第1図）。建物は3.2m×2.6mの大きさで、方形（四角形）です。建物の内部から、鉄を作る際に出る不純物である鉄滓（てっさい）が出土しました（第2図）。焼けた土や炭化物も見られることから、住居というよりも鉄製作に関連する工房跡であった可能性が考えられます。



第1図 竪穴建物（C区）



第2図 鉄滓（C区）

【D区】

10月に工事予定地の立会（たちあい）調査を行いました。その結果、遺構や遺物がたくさん見つかりました。そのため、11月よりD区として本格的な調査を行なうことになりました（第5図）。

D区では、方形にめぐる溝が見つかりました（第3図）。最初は、水田跡と考えましたが、溝の中からたくさんの遺物が出土し、溝の内側では柱穴が確認されたことから、溝で囲まれた掘立柱建物跡であった可能性が高いものと考えます。

溝の近くからは、石製の紡錘車（ぼうすいしゃ）が出土しました（第4図）。紡錘車は、糸をつむぐ際、繊維に撚り（より）をかける時のおもりとして使うものです。この建物に暮らしていた人びとの生活の様子がうかがえます。



第3図 方形にめぐる溝（D区）



第4図 見つかった紡錘車（D区）と使用イメージ

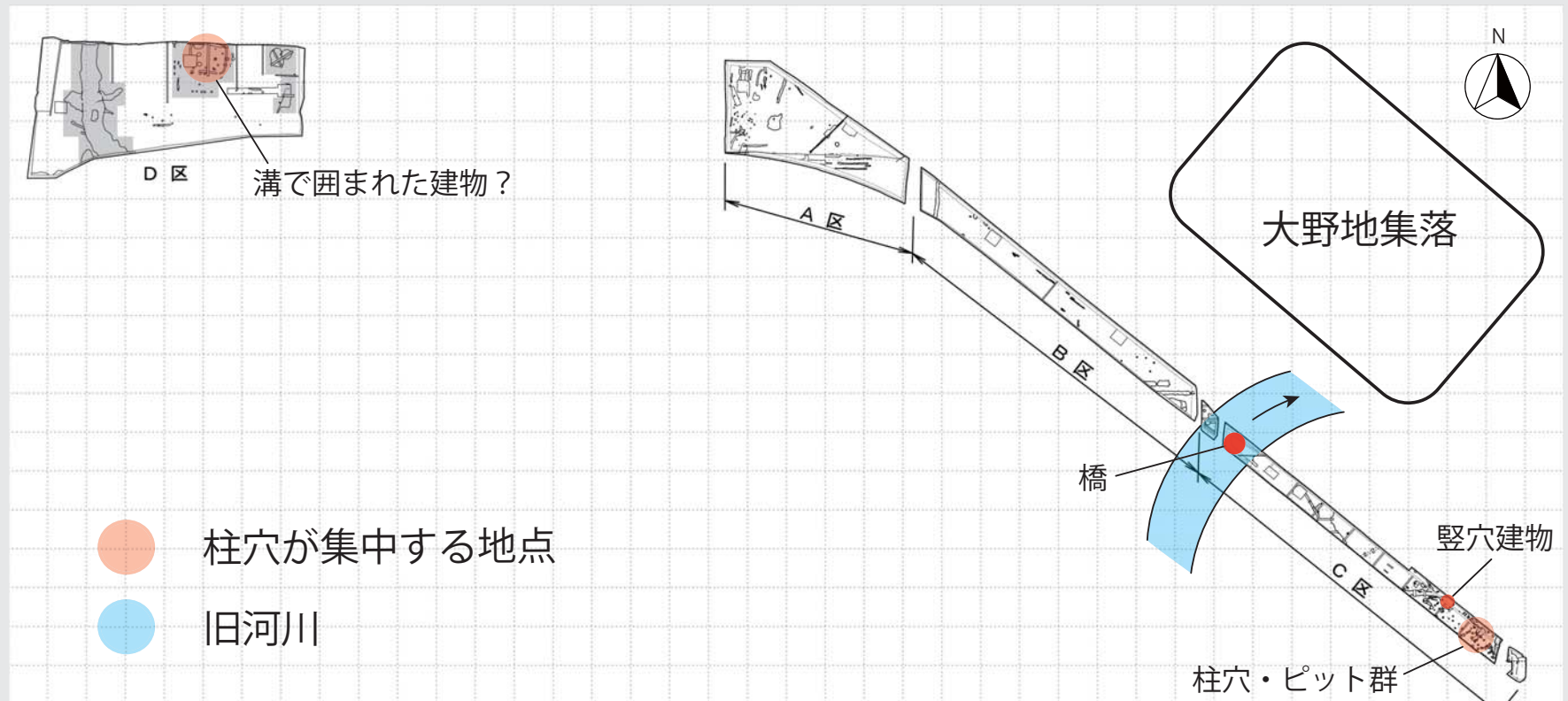
※古澤義久 1997「糸撚り民具から歴史を探る」『南北市報 第11号』に一部加筆

3. まとめ

旧河川西側のA・B区は、当時の生活面が大きく削られていたため、遺構はあまり見つかりませんでした。いっぽうC区は、大野地集落がある微高地の南縁にあたります。「たより 11月号」でもお伝えしたように、旧河川東側では、掘立柱建物の柱穴がたくさん発見されました。このことから、川べりに集落が営まれたことが想像されます。旧河川からは橋脚部材が出土しました。県内では橋の調査事例は少なく、貴重な資料になります。D区でも、溝がめぐる建物跡が見つかったことから、平安時代（約1,200～800年前）には、旧河川の東西両岸に集落が点在していた可能性があります（第5図）。

外輪橋遺跡は、水原と笹神丘陵の中間地点に位置します。遺跡の北側には、昔の安野川が流れていました。現在の安野川は直線的な流路に改修されていますが、元々は五頭連峰を源とし、笹神丘陵を横断して大野地・境新田集落を抜け、百津潟（昔の阿賀野川）へと流れていました（第6図）。平安時代から鎌倉・室町時代には、笹神丘陵で陶器や鉄が盛んに生産されていました。笹神丘陵でつくられた様々なモノが、安野川を利用して水原方面に運ばれていたと考えられます。

発掘調査では、須恵器や鉄のほか、アスファルトや高価な緑釉陶器など特徴的な出土品がたくさん発見されました。外輪橋遺跡は、このような河川による物流ルートの中継点としての役割が想定されます。また、旧河川で発見された橋が平安時代のものであったとすると、当時の陸路による人やモノの往来の実像にも迫ることが可能になる、とても重要な遺跡であると考えます。



第5図 外輪橋遺跡 全体図



- 1 腰廻（こしまわり）遺跡
- 2 発久（ほっきゅう）遺跡
- 3 多須田（たすだ）
製鉄関連遺跡
- 4 柄目木（がらめき）遺跡
- 5 山口（やまぐち）遺跡
- 6 三辺稲荷
（さんべんいなり）遺跡
- 7 土橋（どばし）遺跡

第6図 外輪橋遺跡周辺の古代遺跡